一、カド爺さん

さて、チュンパカ スリー（Chĕmpaka Sĕri）と言ふ名の國があつた。その國王はインドラ・サリ（Indĕra Sari）と云つた。その王樣は他國の王樣と何等異る所がなかつたが、唯異る所は大變鬪雞やバクチが好きであつた。そして常に勝負にふけつて居られるのであつた。王樣がそんな狀態なので、その國民は皆何時もバクチに夢中になつて時を費すのであつた。王や大臣達がこの良くない行ひに夢中になつてゐるのだから、神の使徒（彼の上に平和あれ）のおきてを守らうとする者は一人もなかつた。

この國の國境近くの河の岸にパ・カド（Pa' Kadok——カド爺）と云ふ中年の男が住んで居た。このパ・カドは大變馬鹿で且つ阿呆正直であつた。或る日彼は

妻に云つた「マ・シティ（Ma' Siti）よ、俺はな、王樣の鬪雞場へ鬪雞に行かうと思ふ。其處で大勢の人々がワイ〳〵騷いでゐるのを見るのは大變面白いからな。俺は黃赤色のシ・クナイ（雞の名）を連れて行かう。古くからの云ひ傳へに依ると、あゝいふ雞は大變運が强いさうだから、俺は王樣に自分の此の田地を賭けよう。もし運がよければ王樣から錢がもらへるからな」

彼の妻は云つた。「そんなら家の雞を連れて鬪雞に行つておいで」パ・カドは云つた。「この間俺が買つて來た紙で上衣とズボンを縫つて呉れ。早いこと賴むぜ、未だまだ日が高く昂りきらない內に、鬪雞に出掛けようと思ふからな」そこで彼の妻が云ふには「一體何の爲にお前さんは紙の上衣やズボンを作るのかね。そんな物を着て行つたら鬪鷄場で破れて裸になつてしまふぢやありませんか？　そしてお前さんは大恥をかくぢやありませんか？」パ・カドは云つた。「そんな事なんでも無い。俺はこれから出掛けるのだ。早いこと作つて呉れ」そこで彼の妻は仕方なくハサミを取つて上衣とズボンを斷つた。パ・カドは云つた。「縫はなくても

良いよ。糊で貼りつけて置きな、その方が早いよ」

そこで彼女は斷ち終ると直ぐ樣糊で貼りつけ、出來上るとバ・カドに渡した。彼は直ぐにその着物を着て、赤や黄や黒や白のブガ・タンジョンの花を模樣につけたので大變重さうであつた。

おまけに鷲頭巾をかぶつて、風にさからつて出掛けて行かうとした。オヤオヤ、バ・カドはまるで鬪鷄の先生のやうに見えるぢやないか。準備がすつかり出來あがるとバ・カドは鬪鷄用の拍車を入れた竹筒をもつて黄赤色の鷄シ・クナイを摑みに行つた。それから王樣の鬪鷄場さして出掛けて行つた。間もなく彼は鬪鷄場に到着した。バ・カドが來たのを見て王樣は「おい、バ・カド元氣はどうだ。鬪鷄をしようかね」と云はれた。そこでバ・カドは「陛下、どうぞ一つお願ひ致します。私のこの鷄は運强いかそれとも不運な奴か私は存じませんから」と申し上げた。王樣は「バ・カドよ、一寸此處へ持つて參れ、見てやらう」と云はれたので、バ・カドは直ぐ樣その鷄を差出した。王樣はそれを受け取つてジッと眺めて

居られたが、そのバ・カドの鷄が大變强さうに思はれた。そこで王樣が云はれるには「おい、バ・カド、お前の鷄とわしの鷄とを取り換へようではないか。このわしの鷄を取つてその立派な姿を見てみよ。お前の鷄は黄赤色のシ・クナイだがわしの鷄は白目のジャラだから大變强いのだ」王樣がうまい事おつしやるのを聞いて、バ・カドはすつかり信用してしまつた。「誠におそれながら、喜んで陛下のお召を私の頭のテッペンに戴きます」(仰せに從ふの意)遂に二人は互にその鷄を取り換へたのであつた。バ・カドの鷄を手に入れたので王樣は上機嫌であつた。

王樣は鬪鷄士に拍車を鷄の足につけるやう命令を下された。鬪鷄士はバ・カドと取り換へた黄赤色のシ・クナイに色々なおまじなひをしながら、十字形の拍車をつけた。

バ・カドも亦王樣と取り換へた鷄に拍車をつけた。彼は拍車の刄の部分を前に向け拍車の柄を後に向けて取りつけた。王樣が云はれた。「おい、バ・カド何を賭けようかな?」バ・カドが返答しだ。「つゝしんで申しあげます。私は別に財産と

云つては唯田地を少々持つて居るだけでございます。もし陛下がお許し下さいますなれば、その田地を抵當に五十リアルだけお借り致したいのでございます」

「よし、承知致した」さう云つて王樣は田地をかたにそのバ・カドの要求額をお下渡しになつた。それから、王樣も五十リアルお出しになつたので合計百リアルとなつた。そして王樣はバ・カドに鷄を放つやうに誘はれたので、バ・カドは、

「陛下どうぞ」と申し上げた。そして王樣は二匹の鷄をイキませ、それから二人は荒々しく跳び上り、うなじの毛をさか立てゝ一緒に鷄を放つた。黄赤色のシ・クナイはジャラを襲つた。そしてジャラも直ぐその攻撃にむくいたが、あゝ！バ・カドが拍車を前後をつけ間違つて、刄の部分を前に柄の部分を後につけたが爲にその必死の防禦はかへつて、自分の胸をつき刺し鬪鷄場の眞中でバッタリと倒れてバタバタもがいた。最初の黄赤色のシ・クナイの一撃をくらひ、續いて自分の拍車で自分を刺したのだからたまらない。バ・カドはジャラが死に、黄赤色の鷄が勝つたのを見ると、自分が王樣と鷄を取換へたことを忘れて、夢中で手をた

たき大聲をあげ、あたりを跳び廻つて彼の鷄の勝利を喜んだ。餘り彼が手をたゝき跳びあがつたので、彼の紙の上衣やズボンはひき裂けて終つて、ボロ〳〵になつて風に吹かれてあちこちにひら〳〵と飛び散つた。

そしてバ・カドは多勢の人の居る鬪鷄場の眞中で、まる裸のまゝ立つて居るのであつた。

王樣や、大臣達やその賤しい家來に至る迄バ・カドの熱狂して居る有樣を見て、皆手を打つてわつとばかりに笑ひこけた。同樣に王樣迄も一緒になつて笑ひころげられた。皆が笑ひころげるのを見てバ・カドは皆の人が彼の勝を喜んで呉れて居るのだと考へたので大變驚いた。それから彼がぢつと自分の體を眺めた時にやつと、彼がまる裸で居るのに氣が附いた。

バ・カドは大變恥かしいので眞蒼な顏になつて、我が家をさして一生懸命駈け出して行つた。

王樣は所高い聲で、「バ・カドは運が無かつた。彼の鷄は抵當に入れた彼の田地

を儲けたのだ」と宣言して、王様を初め闘鶏場にゐた總ての人は各々自分の家に歸つて行つた。

さて、バ・カドはわき目もふらずに走つた。彼が家に着くと、彼を見た彼の妻のマ・シティは驚いて「シティの爺さん（マ・シティの夫の意味）氣狂ひのやうな風をして一體どうしたの？」バ・カドはその詳細を話した。夫のその振舞ひぶりを聞いて妻は涙を流してその不運をなげき、ブツブツと彼の馬鹿さに不平をこぼすのであつた。彼は小さくなつて敢て彼の妻に口答へをしようとはしなかつた。それから彼はいつもの仕事をしに出かけた。

× × ×

或る時のことであつた。バ・カドは或る人から施餓鬼に招待された。最初川下の人が明日のお晝に彼の家に來るやうにと言つて來た。そしてその御馳走は一匹の水牛であつた。「承知致しました」と彼は云つた。その人が歸つてしばらくすると今度は川上の人が明日の正午少し前頃に牛を二匹御馳走をするから來て下さいと云つて來た。

その招待にも彼は承知の旨を答へた。日が暮れるとバ・カド夫妻も床についた。バ・カドは毎朝彼の妻が前夜から水の中に浸けておいた冷飯を食べて、それから仕事に出掛けて行くのがいつもの習慣であつた。

さて、バ・カドはその翌朝早く起きて着物をつけ、それから櫂をかついで舟着場さして歩いて行つた。これを見て彼の妻は夫に言つた。「おい、シティお爺さん、飯を食べないのかい。牛や水牛の御馳走にあづかると云ふので此の飯はほつとくのかい」バ・カドは答へて云ふに、「いらないよ、土の上にぶちあけて鶏にでも食はせてやれ」

そこでその通りに彼の妻は飯を土の上にぶちあけた。それから彼は舟に乘つて漕いで行つた。ちやうど其の時川水が非常に早く引いて行く所であつた。

バ・カドは心の中で考へるには、「一體俺はどちらへ行つたらよいかな。もし川下に行くならば漕ぎ疲れないですむ。唯川の流れに從つて行けば良いが、たつた

一匹の水牛ではな。よし、そんなら一つ川上へのぼつてやらう」そこで彼はその引潮にさからつて一生懸命漕ぎ登つて行つた。そして疲れて來ると櫂を止めて考へにふけつた。その間に舟は川下へ川下へと流されて行くのであつた。それから少し休んでまた彼は漕ぎ出した。

かくて、少し漕ぐとまた考へ込みながら手を止めた。間もなく退潮は止みやがて差し潮となつて來た頃やうやくバ・カドは招待された家に着いた。しかしそれが何の役に立たう。それは全く骨折損の草疲れもうけであつた。

時は既に眞晝であり、御馳走はすつかり濟んでしまつた後で、人々は散々伍々その家から自分の村に向つて歸つて行く所であつた。

その家の主人がバ・カドが來たのを見て言つた。「あゝバ・カドさんが疲れてお出下さつたのを見ると全くお氣の毒ですが、もう何一つ殘つて居るものがございません。バ・カドさんはほんとに運が惡いですね」

さう主人が云ふのを聞くと、バ・カドさんは「いや濟んで終つたのなら、致し

方がございませぬ。これがわしの運なのだから」そこで彼は水牛を御馳走して呉れると云ふ家に行かうと下流の方へ漕ぎ下つて行つた。しかしさし潮はひどい勢でさして來た。バ・カドはその差し潮にさからつて餓と渴にもだへながら、暑い最中一生懸命に漕いだ。根が馬鹿者なので途中我が家に立ち寄らうともせず、まだ殘つてゐる水牛に食ひついてやらうと、眞直に川下の方に漕いで行くのであつた。そして差し潮が引潮となるころ、やうやう彼は其處に着いた。その時、時刻は四時過ぎであつて、お客は皆御馳走が濟んだので、自分の家に漕ぎ歸らうとして居る時であつた。この有樣を見て、バ・カドは更にその施餓鬼をする家に立ち寄らうとはせず、舟の向をかへた。

この暑い最中を川を上つたり下つたりしたので彼はすつかり疲れ、腹はへるし、バ・カドの目はぎろ〳〵と光つてゐた。おまけにその歸りも流れに逆はねばならなかつたので、ぶつ〳〵不平を云ひながら、川を逆にのぼつて行つた。やうやく夕暮頃に彼は舟着場に着いた。そこで彼は舟をつないで家に歸つて行つた。

彼の妻が歸つて來た夫がしかめ面をして、ジッと默つて居るのを見て、バ・カドに向つて大聲で云つた。「牛や水牛を食べに行つた人がしかめ面をして居ると云ふのはどう云ふわけですか？　何か氣にくはぬことでもあつたのかい？　肉で腹が一杯でせう」この言葉をきくやバ・カドはのぼせ上つて薪を取り上げ、そして叫んだ。「お前の頭を食つたら腹がふくれるわい」

そして彼は彼の妻の頭をなぐりつけた。これが神の思召しででもあつたのか、ほんとに一度打つたきりなのに、彼の妻はそこに倒れて死んで終つた。バ・カドは彼の妻の死んだのを見ると、自分もその細君のそばに倒れて、ごろごろ轉りながら泣きわめいた。

「あゝ、何て俺は不運なのだらう。川を上つたり下つたりで、疲れ切るし、一日中少しの飯も腹に入らない。あゝ、何て腹がへつたことだらう。家に着けば自分で自分の女房を殺して終ふし、あゝあゝ」かうして彼はなげき悲しんだが、やがて彼の妻を葬る爲めに坊さんや人足を呼びに出て行つた。

とむらひが濟むとバ・カドは彼のこの家を出て行かうと思つた。別に何處へ行くと云ふあてもなかつたが、唯彼の今住んで居た土地から離れたかつたのであつた。

彼はこの家やこの土地に住んで居るから彼の運がかくも呪はれて居るのだ、と考へて居た。決心を定めるとバ・カドは總ての家財道具を荷作りして舟の方に下つて行つた。準備が出來上ると彼は彼の田畑や家から離れた河口の知人の家に留めて貰はうと考へて出發した。

さて、バ・カドは帆を張つて舟のへさきを河口の方に向けた。しかし、可哀想に！　帆を張つて舟の向きを變へたバ・カドの努力は骨折り損であつた。それは、ちやうど彼が帆を張つて居た時に強く吹いて居た順風は、帆をすつかり張り終つて終ふと、まるでバ・カドに怨みでもあつたかのやうにぴつたりと止んで終つた。

それで、バ・カドの舟は風を待ちつゝ或は上に、或は下に、又は川の眞中に時には岸へたゞよふのであつた。このやうな狀態で時が經つて行つた。そして間も

なく殆ど日暮れとなつた。バ・カドの體は全く綿のやうに疲れ切つて居た。遂に彼はぼうとして來たので、ぶつぶつ言ひながら帆を下ろして、錨を下げアンペラを擴げて休憩するため横になつた。

するとバ・カドの運命を不運に導き給ふ全能の神の力に依つて、恰もバ・カドを裏切るかのやうに、順風が相當な速さで吹き出して來た。けれども此の美しき幸福の風も全く無駄であつた。と云ふのは折角のこの幸運も彼の怠惰のせゐで、バ・カドに取つては更に新なる不運となつたのであつた。彼は云つた「チエッ！風の奴め、わざ〳〵俺をペテンに掛けに來やがつた。一日中俺を川の中にたゞよはして置きながらまだ足りないと見えて、川を下ることも出來ぬ。これは皆テメエの强情のせゐだ。俺もお前の望み通りにならないぞ。舟が走らなくつたつてかまふものか」それから彼は、餓と疲れのためにぐつすりと眠り込んでしまつた。

その翌日バ・カドは起き上つて錨をあげ、ゆつくり一日かゝつて漕いで行つたので、夕方になつてやうやく彼の知人の家に着くことが出來た。

そこで彼は荷物をすつかり運んでその知人の家にあがつた。彼は馬鹿であつたので、もう再び自分の家に歸らうとは考へなかつた。そして、何時迄もその家にとゞまつて居た。バ・カドの絶えざる不運に就いて今の人々は次のやうな歌を作つてゐる。

不運なるかな、バ・カドさん
彼の鶏は勝つたが、田地はとられた。
土の上にぶちあける飯はあつたが、
お前は飢ゑて歸つて來た。
引潮に逆らつて川を上り
差し潮にそむいて川を下る。
妻は打ち殺され、
空腹の爲に死にかゝる。
帆を張れば風は止み、

錨を下せば風は吹く、
家はあれども、他人の家に居候。

二、シ・ルンチャイ

さて、インドラ・パティ（Indēra Pati）と云ふ國があつた。その國の王はマハラジャ・イシン（Mahararaja Isin）と呼ばれて居た。その國は他の諸國と同樣諸事萬端とゝのつて居たが、唯その國王がその亡くなられた父王や母君に代つて王位につかれてから餘り日がたつて居なかつた。そしてその王樣のお妃樣はツアン・プウトリ・ボンスー（Tuan Puteri Bongsu）と申し上げ、既に十才になられたツアン・プウトリ・レラ・クンダ（Tuan Puteri Lela Kēnda）と云ふ王子樣が一人あつた。

さて、その國境に一人の貧しい孤兒が住んで居た。その者は人々からシ・ルンチャイ（Si-lunchai）とあだ名せられて居た。それは彼の腹が大きくふくれて居て、

おまけに尻が突き出て居り、その上に彼が歩く時には何時も胸に日光を浴びて歩いて行くからであつた。シ・ルンチャイは籾を乾したり米を搗いたり、薪を賣つたりして生活してゐた。

或る時シ・ルンチャイは是非一度王様にお逢ひしたいと熱望した。そこで彼はそのきたない身なりの儘で出掛けて行つた。所が王様は彼の望みを聞きとゞけては下さらなかつた。こんなことが數回くり返された。或る日シ・ルンチャイは前と違つた着物を着て出掛ける準備をした。今度のは破れては居たが白いガンジャムのズボンをはいて、ヘチマの皮のやうな長くて大きいぼろ〳〵の黒い上衣を着、更に先の方が裂けて尖つてゐる黒い衣を身に付け（肩掛けか？）鷄の腸（？）のやうな更紗の頭巾をかぶつた。それを着け終ると、シ・ルンチャイは王様にお目にかかりに出掛けて行つた。

丁度その時王様は金曜日のお祈りに行かうと思つて髭をそつて居られる所であつた。そこでシ・ルンチャイは王の謁見所に上つて、門の下に行つて王様におじ

ぎをした。すると王様は「おい、ルンチャイ、お前は一體何の用があつて來たのか？」とお訊ねになつた。そこでシ・ルンチャイは平伏して申し上げるには「誠に恐れながら慎しんで申し上げます。私の望みは別にこれと言つてございません。たゞこの尊き陛下の御顏を拜するだけで結構なのでございます」

そこで王様は口をつむんで終はれた。やがて髭もすつかり剃りあがつた。

シ・ルンチャイはふと陛下の頸筋の所に突起があるのを見つけた。そしてしくしくと泣き出したが遂には涙をぼと〳〵と落した。そこで王様が「おい、ルンチャイ、どうしてお前は泣くのだ」とお訊ねになつた。シ・ルンチャイは申し上げて云ふには、「誠におそれながら、私の心は非常に悲しく、陛下のお訊ねにお答へすることが出來ません。お答へ申し上げようと思ひましても或は陛下のお咎めを蒙るやも知れないと存じますので、大變恐縮してをります」「わしは決して怒らぬから云へ」と王様は言はれた。そこでシ・ルンチャイは申しあげた。

「どうかお許し下さいませ。私が陛下のお顏を見て泣きましたわけは、幾重に

もお許し下さいませ。實は亡くなりました陛下の老奴隷（自分の父親の事）そつくりなのであつたからでございます。その頸筋の突起といひ、禿ぶりと云ひ少しも相違がございません。

そんなわけで私の父に逢つたやうな氣が致しましたので悲しくなつたのでございます、それだけではございません、その風采なり年輩なりが陛下と丁度同じなのでございます」

シ・ルンチャイの言ふのをお聞きになつて王様は大變腹を立て、顏面を眞赤にして呶鳴られた。「こら、ルンチャイ。お前はまだ子供で、且つ貧乏人だ。だから考へや智慧の無いのは當然だ。けれども、お前の死んだオヤジとわしの妻とを同じだなどゝ良くも云へたものだ。チエッ、チエッ、わしは決してお前がそんな勇敢な奴だとは思はなかつた。さあお前はわしに對して大なる不忠をなしたのだ。わしはお前ををきつと殺してやる」そして王様は大將にシ・ルンチャイを捕へるやうに合圖された。彼は縛られてドンゴロスの袋の中に入れられた。それから王

様は一人の首切り役人に彼を殺して河の中に投げ込むやうに命を下された。そこで直ぐシ・ルンチャイは首切り役人に依つてサンパンに乘せられて上流の方に漕いで連れて行かれた。

その途中でシ・ルンチャイが聲を出した。「おい、首切り役人さん。どうせ自分は殺されて死ぬのだから、自分の母親だと思つて西瓜を一個抱いて死にたいのです。そして自分の母親と一緒に死んで行くやうな氣持になつてみたいのです」

首切り役人も間もなく死んで行く人を見て哀れに感じて「ヨシ」と答へ、その舟の水を入れてある所から大變大きな西瓜をとつて來させて、それから袋の中から彼を出してやつて、縛をほどいてからその西瓜をシ・ルンチャイに與へた。

その西瓜を抱くとシ・ルンチャイは舟の眞中でワアワア泣き、總ての役人達に言つた。

「首切り役人様、私はあなたがヘトヘトになつて舟を漕いで居られるのを見ると、誠にお氣の毒に思ひます。それで漕いでゐる疲れを忘れて元氣が出るやうに歌で

も歌つては如何ですか」「ぢやどうするのだ、ルンチャイ」とその役人がたづねたので、シ・ルンチャイは「シ・ルンチャイは西瓜を抱いて飛込んだ。と一方がいふと他方が、ホットケ、ホットケと答へるのです」と教へた。そこで役人達はシ・ルンチャイから教へられた通りに大聲をあげて

シ・ルンチャイは西瓜を抱いて飛込んだ！
ホットケ！　ホットケ！
シ・ルンチャイは西瓜を抱いて飛込んだ！
ホットケ！　ホットケ！

と唱ひ初めた。

そんな風な掛合で唱ひながら漕いで行つた。すると、ルンチャイは本當に河の中に飛込んで水の中に潜つてしまつた。しかし役人達や舵手は互に掛合で「シ・ルンチャイは西瓜を抱いて水の中に飛込んだ」と繰返してゐた。

その歌の聲がやかましかつたので誰も氣付くものはなかつた。しばらくして、

舵手が荒々しくどなつて云ふに「おい、皆の者、一寸後を振り返つて見ろ、ルンチャイが飛込んだぞ」そこで皆の者は舟尾の方を振向いた。するとシ・ルンチャイが川の左岸に立つて居るのが見えた。

ワーア！　皆は一生懸命にシ・ルンチャイを捕へるために陸に向つて櫂を漕いだ。そして終にシ・ルンチャイを捕へると彼を縛つて袋の中に投込んだ、それから直にまた漕いで行つた。

× × ×

それから間もなく、神の御召によつて陸の方で連續的に鹿の叫ぶ聲が聞えて來た。シ・ルンチャイは袋の中から云つた。「おゝ神よ。せつかくの獲物も捨てゝしまふのか」首切り役人は尋ねた。「ルンチャイ、お前は何を云つて居るのだ？」そこでシ・ルンチャイが答へるやう「他でもありませんが、あの叫んで居る鹿は先程私が仕掛けて置いた罠にかゝつたのですが、取りにも行けず仕方がありません」そこで、その首切り役人が他の者に言ふには「我々はシ・ルンチャイの罠に掛つ

て居る鹿を取りに行かうではないか」皆の者が賛成したので、舟はその岸に着けられた。

そして役人達は皆シ・ルンチャイが仕掛けた罠を探しに森中探し廻つた。鹿の叫ぶ聲のする所へ、喚聲をあげて全部の役人が駈けて行つた。鹿は人間の聲を聞くと、一層遠くの方へ走つて逃げるのであつた。

さて、唯一人袋に入れられた儘舟の中に殘されたシ・ルンチャイはと言へば、全能の神のお力に依つて、一人のクリン人の商人がそこを通りかゝつた。袋の中からシ・ルンチャイがそれを微かに見て、彼は甲高い聲で叫んで言つた。「どうか幾重にも、いや何千も何千もお許し下さいませ。決して私は陛下の王女樣とは結婚致したくはございません。王女樣と結婚する位ならば此の水の中に投げ込まれて死んだ方がましでございます」シ・ルンチャイがぶつ〳〵云つて居るのを聞くと、クリン人のその商人もその舟に近づいて來て訊ねた。「おい、袋の中に居る人。これ何ある？　これ何人の仕事ある？」

シ・ルンチャイは泣きながら答へるには「私がこんな風になつたのはこの國の王樣が私と自分の娘とを結婚させようとなさつたが、私がそれを欲しなかつたが爲なのです。それで王樣は私を殺さうとなさるのです」

シ・ルンチャイの話を聞くと、その商人は大喜びでその結婚を望んだ。そこで彼は言つた。「何に！　結婚するか？　私は大變好きある。王樣代りに私と彼の娘結婚さすあるか？」シ・ルンチャイ曰く「もしお叔父さんが望むなら、王樣は屹度喜ぶよ。私のやうな貧乏人でも良いのだからお叔父さんみたいな金持ちだつたら文句はないよ。そんなら私を出してお叔父さん私の代りになりなさい」そこでクリン人は舟に乘り込んで來て、袋の紐と、シ・ルンチャイを縛つてある紐を解いてやつた。シ・ルンチャイが出てしまふと、彼はその袋の中に入つた。そこでシ・ルンチャイは彼の手と袋の口を縛つた。そして「王樣の家來がやつて來たら、彼等に、自分はお嬢樣と結婚したいのだ」と云ふやうに敎へた。

クリン人は「承知しました」と答へた。それからシ・ルンチャイはその叔父さ

んの布の包みを背負つて、自分の故郷へ歸つて行つた。

さて、シ・ルンチャイの罠を探しに行つた總ての役人は、いくら探しても罠に出くはさなかつたので、皆各々舟に歸つて來た。

すると彼等はシ・ルンチャイが「私は王樣の娘と結婚したいある。私王樣の娘と結婚したいある」と數十回も繰返して叫んでゐるのを聞いた。皆の者は驚いて云つた。「此のシ・ルンチャイ奴は何故か變なことばかり言つて居る。クリン人のやうな聲色を出してお姫樣と結婚したいなんて？　そんなことを望む奴は一體何處にあるか？　おい、おい、シ・ルンチャイ、さき程は西瓜を持つて飛込むし、今度も俺達を欺す氣か？　お前がどんなにした所で俺達は決してお前を放しはしないよ、今度こそお前は死ぬのだ」

するとクリン人のおつさんは云つた。「私はルンチャイ違ふある。私色々着物賣るのクリン人有る。ルンチャイ行つてしまつた。今度私王樣の娘と結婚したいある」

首切役人が云ふには「あゝ、いゝわい、ルンチャイ、お前がクリン人に化けた所でお前は死なねばならないのだぞ。お前はとうとう氣が狂つて終つて居るのか？　そんな者がお姫樣と結婚したいなんてそれが正當な事と思ふか？　チエッ、チエッ、恥知らず奴」そのクリン人は首切り役人が左樣な事を云ふのを聞くと、一層はげしく泣き出したが、誰も彼に構ふ者は無く、皆各々櫂を漕ぎ續けた。上流に着くとそのクリン人の袋を川の中に投げ込んだ。袋は直ぐ沈んで終つて、彼は死んだ。そして首切り役人達も歸つて行つて、その總ての出來事を王樣に報告申し上げたので王樣は大變お喜びになつた。

× × ×

さて、一方シ・ルンチャイはと云ふと、その夜彼の家に歸りつくと直ぐに寢て終つた。そしてそれから七日の間彼は一歩も外出しなかつた。それはその王樣を破滅さす工夫をこらして居たからであつた。

或る日シ・ルンチャイは彼が欺いてクリン人から卷き上げた頭巾や襦袢等をす

つかり着込んで、おまけに一尋程もある長い珠數と一本の杖とを持つた。そして彼は王樣の謁見所の極く近くにやつて來た。その時王樣は大變多くの人々に向つて坐つて居られ、謁見所は人で一杯であつた。シ・ルンチャイがハジー（回教の高僧）のやうな風をしてゐるのを見て、王樣は驚いて、ぢつと注意して眺めて居られたが、明らかにそれはシ・ルンチャイに違ひなかつた。そこで王樣がおつしやるには、「おい、總ての大臣達よ、それは誰か？　わしはシ・ルンチャイのやうに思ふが」

彼等は皆申し上げた。「誠に陛下の仰せの通り、私共の見る所もそれに相異ありません」すると王樣は、「一寸そのハジーを呼んで見て何處から來たか訊ねて見よ」と、お命じになつた。

大臣は甲高い聲を出して叫んで言つた。「おーい、ハジーさん、陛下がお呼びだからこちらへお出なさい」

それを聞くと、シ・ルンチャイは謁見所に立寄つて王樣に向つて挨拶をし、「信

仰する者達の王樣よ。御氣嫌麗はしう」と申しあげた。「お前も氣嫌よう。マホメットの教徒よ、ところでお前は一體誰なのか？」そこでシ・ルンチャイが云ふには、「おそれながら陛下に申し上げます。私は陛下が先日お殺しになつたシ・ルンチャイの天使（幽靈の事らしい）であります。現在私はあの世の國の者となりました。私は現世のものではございません」これを聞いて王樣初め總ての大臣達は皆すつかり驚いた。王樣は「ほんたうにお前はわしが殺せと命じたので殺されて死んだシ・ルンチャイの天使なのか？」と訊ねられた。シ・ルンチャイは珠數をくりながら答へた。「私は死しだシ・ルンチャイの天使であります。陛下どうか御覽下さい。私の姿や身なりは私の親の天使（幽靈）がすつかり變へて呉れました。私の親達はあの世で神のお慈悲のおかげで大變幸福に暮して居るのですから」

そこで王樣がお尋ねになるには「そんなら、お前は既に亡くられた私の父君や母君の噂をきいたか？」シ・ルンチャイの曰く「陛下聞いたどころの話ではございません。私の兩親の天使に連れられて陛下の父君や母君にお遇ひ致しました。

私は父王様の宮殿や天主閣を見ましたが、今陛下のお住みになつて居られる宮殿よりはずつと〳〵立派でございました」「父君や母君はわしのことをお訊ねにはならなかつたか？」と王様はお問ひになつた。シ・ルンチャイの言上するには「色々お訊ねになりました。私は何もかも知つて居る限り申し上げました。それから私の死ぬやうになつたこともお話し致しました。ところが、陛下が私をお殺しになつた理由をお聞きになると、あゝ陛下の父君御夫婦は大變陛下に對してお怒りになりました。そしておつしやつたのでございます。わしの子供ともあらう者が、かゝる小さなあやまち位で、人を殺すやうに命ずるとは誠に良くないことだ。

それから私の親の天使に私を再び現世に送り返すやうにお命じになりました。それは私の壽命がまだ切れて居なかつたからです。それから父君や母君が私に、陛下にあの世を見物に來るやうに誘つて呉れとおたのみになりました。父王様も母君様も大變陛下をおしたひになつて居られたからです。もし陛下が一たびアチラへお立ちになりますと、きつと陛下はそのあの世が面白いので決して再びこの

世に歸つて來ようとはお考へにならないだらうと、私は思ひます、陛下に父王様や母君様のお言傳を傳へるやうに父王様や母君様からやかましく言はれましたので、これが後になつて私の重い罪となることを恐れて、父王様や母君様の御命令を言上に仕方なく歸つて參つたのでございます。もし陛下が父王様や母君様の御様子を御覽になりたいのでしたらば、この世からでも見ることが出來ます。それは高い建物を造つて、私が教へる一ッのお祈りを續けられまするならば、きつと、容易く父王様や母君の御様子を御覽になることが出來ます。しかし、若しさうしても見えなければ、——何とぞ陛下お許しを——それは陛下が神の掟に從つて居られるのでない證據であります。そのお祈りも私は父王様のお恵みによつて學ぶことが出來ました。そして私は私の兩親が戀しくなるとそのお祈りをあげるのですが、さうすると必ずモヤの中にあの世の色々の有様が見えるのでございます」

王様を初め居並ぶ者は皆、なる程とうなづいて、その話を信じ込んでしまつた。そこで王様は「おい、シ・ルンチャイの天使よ、わしはその建物を七日の間に造

るからよろしくたのむ」とお仰せになつた。シ・ルンチャイはおじぎをして、「陛下、陛下の御命令に従ひます」と云つた。シ・ルンチャイは陛下におじぎをしてお暇を告げて家に歸つてジッとして居た。

さて陛下は總理大臣に直ぐその建物を造るやうに命じられた。そして陛下の命令通り人々は仕事を始めた。

間もなくその建物もすつかり出來あがつた。

シ・ルンチャイとの約束の日が來たので彼は王様の前に出た。陛下はシ・ルンチャイを初め、大臣大將やその他の家來達を從へてその建物の上にお登りになつた。皆が坐に着くとシ・ルンチャイは王様や大臣達にその祈禱を敎へた。シ・ルンチャイはおじぎをして云つた。

「おそれながら、もしこの祈りを全部唱へて終つて、父王様や母君を初めあらゆるあの世の人々の姿が見えないならば、その時こそは、陛下が全く呪はれたる人間であることが明らかになるのです。さう云ふ風にお父君や母君が私にその祈り

を敎へて下さる時に、お告げになつたのです」王様は、「神の思召しなれば如何なることにもわしは感謝してお受けする」とお答へになつた。

王様がシ・ルンチャイからその敎へをお受けになつた後、シ・ルンチャイは王様に申しあげた。「陛下どうぞ父王様や母君を御覽になるために天を仰ぎ見て下さい」王様をはじめ皆の者はそれを聞いて首を突き出して頭を上に向けた。シ・ルンチャイも一緒に天の方を眺めて居るふりをするのであつた。そしてシ・ルンチャイは陛下に、「陛下、いかゞでございますか？　御父君と母君が、天女達に取りまかれて、滿足げに王座に坐つて居られるのが見えませんか、陛下本當のことをおつしやつて下さい」シ・ルンチャイの云ふのをお聞きになつて、陛下はしばらくの間ジッと默つて考へ込んで居られた。

そして心の中で、「見へると云いたいが、わしの見えるのは雲ばかりで、他に何物も見えない。しかし、わしが見えないと云つたらシ・ルンチャイはわしを呪はれた人間だと云ふだらう、えゝ、そんならシ・ルンチャイに罵られないやうに嘘

をついてやらう」と考へられた。そこで陛下はあの世の有様がすつかり見えると答へられた。大臣達は陛下のそんなに云はれるのを聞くと皆陛下のおつしやつた通り眞似をして皆見えると答へた。

それから、シ・ルンチャイは云つた、「もし陛下が未だ充分滿足でないのでございましたらば、明日私は常に逢ひたい〳〵と思つて居られる陛下の戀慕の情が消えるやうに、父君や母君の御前にお連れ致しませう。さうすれば只今陛下が御覽になつたよりも、一層不思議で珍しい光景を陛下は御覽になることが出來ませう」陛下は仰せになつた「よし、明日わし自身父君や母君の所へ行かう」總ての大臣達も一緒に行くことを願つた。そこでシ・ルンチャイは彼等に向つて云つた。「先づ陛下だけお連れ申し、陛下が再び現世にお歸り遊ばされてから、閣下達をそこにお連れ致しませう」

話が濟むと王様はその建物の上から總ての大臣達につき添はれてお下りになつた。シ・ルンチャイは謁見所に戻つて來ると、王様はシ・ルンチャイに向つて、

「明朝早くルンチャイとわしとは直ぐに行くのだぞ」と仰せられた。シ・ルンチャイは、「よろしうございます。しかし陛下、外側に格子細工を施したガラスの輿を一ツ作つて頂きたいのです、それからそれに綱をつけて、そして陛下の身の廻りの品と辨當をのせて頂きたいのです」と申上げた。王様は、「ルンチャイ承知致した」とお答へになつた。王様は直ぐに數人の職人にシ・ルンチャイが云つた通りの輿を作るやうにお命じになり、必ずその夜の内に仕上げるやうにお云ひ附になつた。職人達はその夜の中に仕事をしあげた。陛下は職人達にお命じになつた後お妃やお子様達にお逢ひになる爲に宮殿にお入りになつた。

シ・ルンチャイや大臣達は家に歸らずにその謁見所の中で寢たのである。

× × ×

さてその翌日となつた。王様はお起きになつて、妃、王子と三人で水浴をなさつて、それから食事をお取りになり、お菓子を召上つた。そして、それが濟むと、王様はお妃に別れの挨拶をして、その王子を抱いて接吻をなさいました。それか

ら謁見所にお出ましになつて、其處に來て居た大臣達や大將達、その他の家來達にお逢ひになつた。輿は既にスッカリ出來上つて居た。王樣はシ・ルンチャイを御覽になつて、おつしやるには、「ルンチャイよ、都合はどうだ」そこでシ・ルンチャイが答へて、「陛下どうぞ」と云つた。そこで王樣は大臣大將を初めその他の家來達につき從はれて御出發になり、シ・ルンチャイに連れられて、唯神樣のみが御存知である一ッの深い〳〵穴の入口に進んで行かれた。間もなく其處に到着した。

そこでシ・ルンチャイは陛下に申しあげた。「つゝしんで申し上げます。これが私があの世から此世に出て來た道なのです」王樣は云はれた。「そんならば我々は直ちに下りよう。大臣達はこゝに待たして置かう」シ・ルンチャイは云つた。「どうか陛下此のガラスの輿の中にお入り下さい。そして私を輿の外側の格子細工の所に坐らせて下さい。人々が綱をゆるめて下へ降すのに私があの世への道案内を致しますから」

そこで、王樣は輿にお入りになつた。そしてシ・ルンチャイは輿の外側に坐つ

た。すつかり準備が出來ると、大將大臣達は綱をゆるめて、王樣とシ・ルンチャイを穴の中へ降し初めた。その輿が下り初めようとした時シ・ルンチャイはその輿から身をそらす用意をした。全能の神のおぼし召によつて、その穴の中にはもう一ッこの世に再び歸ることの出來る別の穴があつた。彼はそれを見付けると素早くその穴の端に突き出て居る岩の上に跳びついた。

その輿が穴の上の人達に依つて大層速くゆるめられて行くので、王樣は跳び出す間がなかつた。王樣は益々暗くなつて行くのを御覽になつた。遂には息がつまつて、呼吸することが出來なくなつた。全能の神の御意志に依つてその輿は丁度一匹の大變大きな龍の口の中に落ち込んだのであつた。あゝ龍はそれを知ると直ちに呑み込んでしまつた。かくて王樣は薨去されたのであつた。

さて、シ・ルンチャイはと申せば、王樣がその輿の中から出ることが出來ず、どん〳〵と下の方へ降つて行かれ、遂に見えなくなつてしまつたのを見て、彼は大聲で叫んで云つた。「おーい、大臣大將たちよ、綱を切れ、わしは父君や母君に

逢つたぞ、そしたら父君や母君はわしを再び此世へは歸して下さらないのだ。それで、わしはシ・ルンチャイにわしの代りに此の國の王になつて、わしの娘のツアン・プウトリ・ニラ・グンディ（Tuan Putĕri Nila Kĕndi）と結婚するやうに命じて歸したぞ」それを聞くと彼等は皆各々王樣の宮殿に、王樣の御命令をツアン・プウトリ・ボンスー（王妃）と御子樣にお傳へしに歸つて行つた。あゝ、王妃とお姫樣がその知らせと、王樣の御命令を聞くと、お二人の心はちぢにくだけたかと思ふ許り悲しまれ、體をなげつけて歎き泣きわめかれた。そして總ての女官達も同じやうに歎き悲しんだので、その泣き聲はまるで人々が宮中で暴れ廻つて居るやうであつた。そして妃と姫の二人は氣を失つてしまはれた。女官達はバラの水をふり掛けた。やがて正氣附かれると、二人は王樣のお祭りをなすやうにお命じになつた。かくて二人は喪に服されたのであつた。

さて、一方ルンチャイは七日七晩出口を探してその穴の中で苦しみながら過した。全能の神のお思召によつて、光の差して來る道にそつて進んで行くことが出

來たので、彼は外に出ることが出來、無事に家に歸りついたのであつた。

その翌日シ・ルンチャイは王樣の謁見所に行くやうなふりをして歩いて居た所、大臣や大將やその他の家來がシ・ルンチャイを見付けると各々挨拶をして、彼の手を引張つて謁見所に連れて上り、王座に坐らせ、大臣達はその下の方で彼に向つて坐つた。總理大臣は大聲で言つた。「おい、諸君達よ、大小、老若、男女、貴賤、總ての國民達よ、あの世に旅立たれた陛下の御命令に依つて、ルンチャイ殿は先の王樣の身代りとして、我々總ての王となられた。そのわけは、さきに亡くなられた先君から再び此世に歸る許しが出ないのだからである。それから、王樣は王樣のお姫樣であるツアン・プウトリ・ニラ・クンディ樣と結婚せしめるやうにお命じになつたのだ」

そこに來て居た者はこれを聞くと大變に驚き、皆ジッと默つて一言も發しなかつた。シ・ルンチャイの畜生もさも驚いたやうなふりをして、「おゝ、神樣！　どうして閣下はそんなことをおつしやるのですか？　私は決してそんなことを希望

しません。私は完全にあの世の國の人となつたのですから、この世の事には何の希望も無いのです」そこで總理大臣の云ふには、「私はあへて王樣の御命令にそむく勇氣がない」そこでシ・ルンチャイも默つてしまつた。大臣は言葉をついだ。

「今直ちに私は王女樣とおめあはせ致さうと思ふ」そこで結婚役人はシ・ルンチャイとツアン・ブウトリ・ニラ・クンデイとを結婚せしめたが、別に儀式ばつたこともせず、たゞ一寸二人の安全を祈るお祈りをささげただけであつた。

さて時間が來たので、シ・ルンチャイは姫と一緒に寢所に入つた。ところが、ツアン・ブウトリ・ニラ・クンデイはシ・ルンチャイの顏を見ると大變嫌つて泣き出した。いくたびか女官達が姫をとりなしたが姫は父上のことを思ひ出してねむらうとはせなかつた。やがて夜明け近くなつた。シ・ルンチャイはねむくなつて寢てしまつた。お姫樣は心の中で思はれた。「妾がお父樣と別れるやうになつたのはこのシ・ルンチャイの畜生のためだ。よし、そんなら妾は彼を殺してやらう」さう考へてお姫樣は父上のクスリ（短刀）を取りあげ、シ・ルンチャイの喉笛を

突き刺した。彼はうめき聲をあげたが間もなく死んでしまつた。お姫樣は事の詳細を母君に報告するために走り出て行かれた。ツアン・ブウトリ・ポンスーも大變恐れられて、總理大臣を呼ばれた。

彼は宮殿の中に入ると、「あなた樣は、あなた樣の夫樣をお殺しになつたのは一體何の故でございますか？」と訊ねた。ツアン・ブウトリ・ニラ・クンデイは、「このシ・ルンチャイの畜生のおかげで、妾は妾の父上とお別れするやうになつたのです。あの世へ旅立たれたなどと云つて居りますが、或は彼が父上を殺したのかも知れません。妾は決してあんな呪はれた言葉を信じません。もし彼が生きて居たなら屹度あなたも殺されたでせう。疑ふ餘地がありません」

お姫樣がさうおつしやるのを聞くと、總理大臣とお妃樣は、ことごとくシ・ルンチャイに欺されたがために起つた、過去の總ての出來事を歎き悲しまれ、思慮の足りなかつたが爲に、あのシ・ルンチャイの畜生の言ふ通りになされて、ひどい目にお遇ひになつた王樣のことを思つて、大臣も妃も姫も激しくお泣きになつ

た。それからシ・ルンチャイの死體は適當に葬るやうにお命じになつた。やがて大臣達は父王の代りにツアン・プウトリ・ニラ・クンディを王位につけて、國政を取つて頂くことに相談を決めた。そして總理大臣が之を助けて、以前の樣に正しいまつり事を行ふことになつた。ツアン・プウトリ・ボンスー（母君）は自分の娘が女王となつたのでお喜びになり、そして此のお二方は常に全能の神を敬ひ再び夫を持たうとはされなかつたと言ふことであります。

註 この二篇のマレーの滑稽物語はいづれも Cherita Jenaka と言ふマレー語の本から譯したもので、同書は Malay Literature Series 6 としてシンガポールで發刊（一九三二年再版）されたものである。同書にはこの二篇の他にパンディール爺さん、不幸なる坊さん、ブラン爺さんの三篇を收めてゐる。

この種の滑稽物語はマレー半島はもとよりスマトラ方面やその他の東印度邊一帶の民話として廣く傳はつてゐるものである。シ・ルンチャイ中の王が亡き父母君の姿が見えぬのに見えると嘘を言ふあたり、アンデルセンの童話の王樣の新しい御衣を思はせる所がある。

東印度の雜誌から

一、マレー語の代表的文學
二、スマトラ島に於ける民族と言語
三、東印度の人口問題
四、米國に於けるインドネシヤ人

一、マレー語の代表的文學

マレー文學を時代により大別すれば、

（一）古典時代

（二）中世

（三）現代

の三種に分けられる。

何時から何時までが古典時代に入り、何時から中世に入るかと言ふことを正確に區劃することは困難であるが、文學の內容により判斷して大體の區別を付けることは出來る。これ等三時代の文學にはそれぞれ他の時代のものに見られない特色がある。

古典及び中世時代の文學は物語（hikajat）と四行詩（pantoen）の文學であり、現代文學は小說（roman）及び自由詩（sandjak）の文學である。

物語卽ちヒカヤットは主として王及び王族に關する物語であつて、不思議な出來事の連續で飾られてゐる。これに反して小說卽ちロマンは現代人の日常の出來事を述べ、其の悲しみ、喜び、愛と憎しみの情を書き出してゐる。

四行詩卽ちパンツンは形態的に見て奇妙な特色を有し四行から成つて居る。初めの二行は後の二行の韻律の前提となつて居て、詩の意味は後の二行の中に含まれてゐる。更に上の二行と下の二行との間の意味の連絡が取れてゐない場合が多い。これに反して自由詩卽ちサンヂャは初めから終り迄一貫して、詩人の心の喜び及び悲しみの情を寫し出してゐる。

古典時代より中世の間の文學作品は大部分その作者が不明である。特に四行詩パンツンの作家に至つては、全然と言つて良いくらゐ作者名が判らない。これは文學を愛する人に取つて悲しむべきことである。過去においては物語やパンツン

を作ると言ふ行爲が、大して重要なこととと考へられては居ず、宗教書以外のかうした文學物に、著者の名前を現すと言ふことが一種の不道德のやうにすら思はれて居たからであらう。

物語卽ちヒカヤットの中には韻文の形のものもある。これは四行宛一かたまりとなつて、同じ韻を含んで最後迄つゞいてゐる。これを詩（sjair）卽ちシャイルと呼ぶ。

又バンツン（四行詩）の中に四行とも一ッの一貫せる思想を持つて居て、本來のバンツンのやうに上の二行と下の二行が各々獨立した內容を有して居ないものがある。これをスロカ（seloka）と言つて居る。

× × ×

古典物の中で最も有名な物語はハン・ツア物語（Hikajat Hang Toeah）である。この物語は未だ外國文學（インド及びペルシャ文學）の影響を受けて居ず、完全なる純粹のマレー語の文學である。

このハン・ツア物語はマレー人の王國の黃金時代の有樣を物語つたもので、當時の王國はマレー半島に中心があり、スマトラに勢力を伸しジャバ島の王國とその勢力を競つてゐた。また當時は屢々ボルネオに遠征し、印度のクリン（Keling）人の王國や支那、シャム、カンボチャとも國交があり、更に遠くエジプトやローマ邊にまでマレー人が航海して居た時代である。

ハン・ツア物語は古代のマレー王國の統治形態、習慣、軍事及び王の行列の時の左右の警護ぶり等について研究する人に取つては非常に有益な資料である。

この時代のマレー王國ではこの世における神の影として國王卽ちヅリー・ヤン・マハ・ムリア・ジルーラヒ・フィル・アラム（Doeli Jang Maha-moelia Zilloe'llahi fi'l-'alam）が居り人民の生殺與奪の大權を握り、その下に國政を掌握するダト・ブンダハラ（Datoek Bendahara）と稱する總理大臣兼大藏大臣が居り、更にその次にツムンゴン（Temoenggoeng）と稱する國家の治安を維持するための內務大臣が居たのである。更にこの二大臣の他に海軍大臣として總ての大將の上に坐

るダト・ラクサマナ（Datoek Laksamana）が居る。當時のマレー王國は海洋王國であつたから、海軍大臣が國防上の最高地位に就いて居たのは怪しむに足りぬ。

この物語の中で我々は當時の王女達の地位を知ることが出來る。マラッカ王がブンダハラ・インドラプラ（Bendahara Inderapoera）――インドラプラ地方の大守で總理大臣の位にあつたラジャ（小王）――の姫に結婚を申込んで來た時、ブンダラハラはこれを自分の娘に話し、娘がその申し込みを拒絶してゐる。その時姫の言葉として、『父上御覽下さい。父上はインドラプラの大守でございます。でも或る種のことについては父上樣にも發言權はありません。古いパンツン（四行詩）にも「角鳥のことは角鳥にまかせ、雀のことは雀にまかせよ」と申しますもの』と返答して居る。

ウイルキンソン（Wilkinson）によれば、このハン・ツア物語は西暦一五五〇年に出來たものだと言ふから、當時の姫は結婚に關しその夫を自分で選ぶ權利をもつて居たと言ふことが出來る。

ハン・ツア物語は非常に變化に富み、ジャバの王宮の中の有樣から、支那の王の前にまで我々を引張つて行つて呉れる。

× × ×

スジャラ・ムラユー（Sedjarah Melajoe）の名で知られて居るサラッースサラティン（Salatoe'ssalatin）即ちマレー王國史は、珍しくも作者の名前が判明してゐる。ツン・スリー・ラナン（Toen Seri Lanang）が作者であると言はれて居り、彼はブンダハラ・バヅカ・ラヂャ・ヌグリ・ジョホール（Bendahara Paoeka Radja negeri Djohor）即ちジョホール王の總理大臣であつた。書かれた年代は回教暦九百二十一年即ち西暦一六二一年である。

この本はアレキサンダー大帝より初まり、マレーの王の歴史があつて、マラッカ王國の最後の王であるスルタン・アフマッド（Soeltan Ahmad）で終つて居る。その當時時のポルトガル人のマラッカ攻擊が行はれ、マラッカ王はビンタンへ逃去して居る。

このスジャラ・ムラユーには二種の原本がある。その一つはアブドラ・ビン・アブトルカディル（Abdoellah bin Abdoelkadir）が一八四八年にシンガポールで出版したもので、もう一つはシエラベア（W. G. Shellabear）が矢張りシンガポールで出版したものである。しかし後者の方が前者よりもずつと内容が多い。アブドラ版はポルトガル人のマラッカ攻撃で終つて居るが、シエラベア版の方はポルトガル人のマカム・タウヒット（Makam Tauhid）攻撃を以て終つて居る。これはシエラベアがツン・スリー・ラナンの原典の他に誰か別人の著作を追加したものであらうと言はれてゐる。

× × ×

物語詩（シャエル）の中で特に代表的なものはケン・タンボハンの詩（Sjair Kèn Tamboehan）である。この詩は回教がインドネシヤ（東印度）に渡來する以前のものである。

プラ・ネガラ（Poera Negara）の王子が、自分の掠奪して來た王女ケン・タ

ンボハンを戀して居るが、彼は强制的にバンジャル・クロン（Bandjar Koelon）の姫と結婚させられようとする。しかしプラ・ネガラの王子の心はケン・タンボハンにそゝがれて居るので、皇后は獄吏に命じて王子を狩りに出して、その間にケン・タンボハンを殺させて終ふのである。

この詩はジャバ・マレー・泰國邊一帶に分布するパンヂー物語に源を有するものであつて、ロールダ・ファン・エイシンガ（Roorda van Eijsinga）に依れば著者はアリー・ムスタティル（Ali Moestathir）であると言ふ。

× × ×

次に中世時代のものに移つて、有名な文藝作品に、タミール語及び英語の通譯であつたアブドラ・ビン・アブドルカディル・ムンシ（Abdoellah bin Abdoelkadir Moensji）の著作がある。

彼の傳記は彼自身の自敍傳たるアブドラ物語（Hikajat Abdoellah）の中に述べられてゐるから詳細に知ることが出來る。

又彼はタミール語からパンヂャタンドラン物語（Hikajat Pandjatanderan）をマレー語に飜譯してゐる。更に彼の著作にはケランタンへのアブドラ航海記（Kissah Pelajaran Abdoellah ke Kelantan）及びメッカへのアブドラ航海記（Kissah Pelajaran Abdoellah ke Djeddah）がある。このメッカへの航海記は彼の最後の作で、彼はメッカへの巡禮の途中で死んだ。時に西暦一八五四年であつた。

アブドラの父はマレー產れのアラビヤ人で母はマレー人である。彼の母方の祖父はタミール人であつた。かうした關係で彼はタミール語に興味を持つたものであらう。

アブドラはマレーの初代英國總督ラフラスに仕へ、彼のために多くのマレー語の書籍を集めた。なほアブドラはマレー語の辭書をも作つたと言はれて居るが、出版はされなかつた。彼はマレー半島のキリスト教宣教師のマレー語教師を勤め、彼の自敍傳の中に當時のシンガポールの有樣を目のあたりに見ることが出來る。

しかし彼のマレー語文には所々妙なくせがある。

× × ×

現代に入るとムハマッド・ヤミン（Moehammad Jamin）やルスタムエフエンディ（Roestam Effendi）等の新しい作家であり且つ詩人である人々を出して居る。更にこれ等の現代文學者は大抵政治運動者である點は注目すべきであらう。

現代の作家は西洋文學特にオランダ文學の強い影響を受けてゐる。彼等の胸の中には西洋の文化と東洋の傳統とが互に波打つて居る。從つて彼等は西洋式のソネットを好み、彼等の新しい詩には起伏凸凹にしげく、古いパンツンの平調なのとは相對的であるが、矢張り形の上からはパンツンの式を保有してゐる。

ごく最近の文學者の中の最も傑出せる二人は、サヌシ・パネ（Sanoesi Pané）氏とスタン・タクディール（Soetan Takdir）氏とであらう。

サヌシ・パネ氏はインドネシヤ（東印度）における佛教時代のことをよく書いてゐる。彼の叙述は月が夜の青空をすべつて行くやうに明るく穩かである。そし

て又彼程マレー語の使ひ方に一語一語注意深い人はない。

彼の代表的傑作はマダ・クラナ（Madah Kelana）の詩であらう。

一方スタン・タクディール氏は鬪爭的で新しい物が好きである。彼はまた批評家として著名であり、新文學運動の一派であるプーヂャンガ・バルー（Poedjangga Baroe）誌による青年達の旗頭である。

擴げられた帆（Lajar Terkembang）等が其の代表的小說と言はれて居る。

註　本文はツンクー・アミール・ハムザー（Tengkoe Amir Hamzah）氏がメダンの放送局で行つた文藝講話を抄譯したものである。インドネシヤ放送協會の機關雜誌スアラ・テイーモール（Soeara Timoer）に連載されたものより譯したが、完譯すればこの三倍くらゐになるので、抄譯とした。

スマトラ島に於ける民族と言語

言語を研究するためには民族を知らねばならぬ。民族を知るためには歷史を繙かざるべからず。

ジャバ島においては民族と言語の問題はいたつて簡單である。しかしスマトラではさうは行かない。

スマトラの言語の數やその通用地域を正確に述べることは不可能である。これは人類學者達が說明してゐる如く、スマトラへの人種の渡來は一度に來たのではなく何回にもわたつて來て居るのであるから、それもあへて怪しむに足りぬ。

スマトラ島の原住民はジャクン、スマン、スカク、クブー、ルブー（Djakoen, Semang, Sekak, Koeboe, Loeboe）等の種族だと言はれてゐる。これ等の原住

民は現在なほシアック、リアウ、バンカ、バレンスバン、タバヌリ（Siak, Riau, Bangka, Palénsbang, Tapanoeli）等の地方で少數住んでゐる。

彼等は數も少く一般人と交はることを欲しない。今も野蕃のまゝである。これ等の原住民はマレー半島のサカイ（Sakai）族、フィリピンのネグリート（Négrito）アンダマン、ニコバル、アルフルー、パプア人等と同樣、所謂オーストロネシア人種ではない。これ等の人種が南洋へどうして來たのかまだはつきりしない。

× × ×

現在のスマトラの土着人はアジア（印度の後方）より來たものと考へられて居る。一九三九年のデリー・コウランツ（Deli Courant）に發表されたファン・エールデ（Van Eerde）ヴ・スワーン（de Zwaan）、シュニットゲル（T. M. Schnitger）博士等の意見に依れば、

「太古にスマトラへ初めてやつて來た人種は蒙古とビルマの邊疆地帶より來たものであらう。この種族は現在ではニアス（Nias）島及びバツー（Batoe）島の方

へ追ひやられて居る。ニアス人の身體を見れば直ちに蒙古人種に似ていることに氣付くであらう。ニアス島の巨石文化は他のインドネシヤ人種の中で發見することは出來ない。習慣や、踊等もニアス人は他のインドネシヤ人と異つて居る」

と言ふことである。

メンタウエー（Méntawai）島や、エンガモー（Enggano）島地方の住民はニアス人と他の人種との混血したものであらう。ニアス語に於ける特色は他のインドネシヤ語に多い ng と言ふ音で終る語が無いことである。

なほ容貌から見ればボルネオのダヤック（Dajak）人やセレベス島のミナハサ（Minahasa）人も同樣蒙古系のやうに思はれるが、この兩種族がニアス人と同じ時分に渡來して來たのかどうか、又ニアス人との關係如何等の問題については前記の諸學者は何等論及して居ない。

× × ×

この蒙古系人種のスマトラ移動があつて數世紀（？）後現在のバタ（Batak）

族の祖先がスマトラへやつて來た。これは現在の佛印（安南）方面からであらう。

さきに述べた諸氏の調査によるとスマトラのトバ（Toba）湖附近で、この邊がバタ族の祖先の渡來地であつたと言ふ證據の品々を發見して居る。

顔付きを見ても又習慣もバタ族はニアス人や、バタ族よりも後からやつて來たマレー人とは全々違つて居る。

例へば、バタ語のアクセントは最後から二番目のシラブルにおちるのが多いが、マレー語は最後のシラブルに落ちるのが多い。

（譯者註——一般にマレー語の文法書にはマレー語のアクセントは終りから二番目のシラブルに落ちるとある。しかし譯者はこの說には反對であつた。スマトラ邊ではマレー語のアクセントは語尾のシラブルに來るのが多いことは「スマトラ人」の本文の筆者が自ら語つてゐる。現在行はれて居るマレー語アクセントの最後から二番目シラブル說はマレー語はマレー人のマレー語としてゞなく、南洋の共通語としてのマレー語のアクセントとして人工的に定めた法則である。我が國で出版されて居るマレー語文法書が全々無批判に歐洲人の著述を取り入れて居るのは殘念である。これ

からの我々は、南洋の住民人ともつと接近して住民人より直接得た資料によることが必要である）

又バタ族の頭腦はマレー人よりもすぐれて居る。將碁の樣な頭を使ふ遊びをバタ人は好んで居る。

バタ族は固有の文字を有して居る。ニアス族もマレー族も固有文字を有して居ない。バタ族の文字はホールフーフエ（Voorhoeve）博士によれば印度文字から來たのだと言ふ。

（譯者註——現在マレー語はローマ字で書かれて居るが、回教の渡來後十九世紀の中頃迄は專らアラビヤ文字が使用された。ジャバ人はジャバ文字、セレベスのブギス人はブギス文字と言ふ固有文字を有して居るが、マレー語には固有文字はない）

バタ族の中心地はスマトラのトバ湖附近で彼等はこの地方の山中で、彼等より後れて渡來した人種の大した影響を受けることなく住んで居たのである。山獄は彼等の習慣に他の部族の影響侵入を防ぐ要塞の役目をなして居た。バタ族中附近

の他の種族(アチェ人、マレー人等)の影響を強く受け、混血したものがマンダイリン、シムルゴン、カロ、バクパク、アラス、ガヨ(Mandailing, Simeloengoen, Karo, Pakpak, Alas, Gajo)等の種族となつた。これ等の種族の間には相互に類似點が多い。セレベスのトラヂヤ族もこのスマトラのバタ族からの分派であるかどうか、まだ證明されて居ない。

× × ×

ランポン((Lampoeng)人も固有の文字を有して居る。その文字はバタ族の文字と類似して居る點がある。ブルタンダン(娘の家へ青年が夜遊びに行く習慣)がまだランポン人の間でもバタ族同樣行はれて居る。

マレー人やバンテン(Bantén)人との混合の結果言語も習慣も非常に變化して居る。又バスマ(Pasemah)及びルヂャン・ルボン(Redjang Leboeng)族もランポン族と同じ先祖より出たものと考へられて居る。

しかし何故この種族が北スマトラのバタ族とは遠くへだたつた南スマトラに分

れて住んで居るかについては未だ充分その歴史がわからない。

東印に於ける固有文字を有する他の人種は、セレベスのブギス人とマカッサル人とである。更にジャバ人も固有文字を有して居るが、バタ文字に比べるとずつと若い。

(**譯者註**——爪哇語は古くはサンスクリットで書かれて居た。後に現在の爪哇文字が工夫されたが、回教の間ではアラビヤ文字で爪哇語を書いたものが多い。現在ではローマ字で書かれて居る)

× × ×

スマトラへ第三回目に移住して來た種族はマレー人で、印度の後方テナスリム南部及びマレー半島の北のメルグス群島邊からやつて來た。しかしこの時のマレー人は現在南洋の海岸地帶に住んで居るマレー人、即ちリアウ・マレー人とは言語及び習慣とも全く違つた人種であつた。

これ等の原始マレー人が現在のスンダ、ジャバ、マヅラ、タガログ、臺灣(高

砂族)、ニューヂランド(マオリー族)、マダカスカル(ホバ族)、ハワイ等の土着人の祖先であるかどうかは知らぬが、まだバタ族と彼等の關係についても報告されて居ない。しかし同じオーストロネシア系であることは確である。

× × ×

たゞ歴史によれば第六世紀頃スマトラ南部にスリウイヂャヤ(Seriwidjaja)と言ふマレー人の大王國があつた、この王國は西暦前三百三十六年—三百二十三年にかけて印度に勢力をはつたイスカンダル・ズルカルナイン(アレキサンダー大帝の時代にスマトラへ來たヒンヅー人が建設した國であると言はれて居る。それ等のスマトラへ來たヒンヅー人は、時の政府に壓迫されてスマトラへ逃れて來たものであらう。

スリウイジャヤ王國は一時非常に榮えて居た。大學校もあつて支那からも多數の者がスリウイジャヤへ留學に來て居る。スリウイジャヤ王國のことは支那の本から知られて居るのである。

だいたい十一世紀頃になつてスリウイジャヤ王國はカロマンデル(Karomandel)王國の戰に敗れて滅亡した。その後中部スマトラに矢張りヒンヅー人の子孫を王とするマレー王國が出來た。國王の名はアディチャワルマン(Aditjawarman)と言つた。この王國の歴史についてもまだはつきりしない點が多い。たゞスンガイタラップ(Soengaitarap)の碑文がこれに關して多少の知識を提供して呉れる。しかしヒンヅー教寺院の舊蹟はバレンバン、ジャンビー(Djambi)、スマトラ西部、パダンラワス(Padanglawas)地方に多く見受けられる。これ等の地方のヒンヅー教寺院は、ジャバのヒンヅー教寺院よりも古い。然しヒンヅー語(梵語)のスマトラ土着人の言語への影響は、ヒンヅー語のジャバ語への影響の樣に著しくはない。

× × ×

十五世紀まで勢力のあつたモジョパヒット(Modjopahit)王國はジャバに起り、スマトラまで其の勢力を擴げた。その當時スマトラ中部にミナンカバウ(Minan-

gkabau）と言ふ王國があつた。傳說によればミナンカバウはモジョパヒット人と水牛（kabau）を鬪はせて勝つた（Minang）のでミナンカバウと稱するのだと言はれて居るが、これは單に諷刺であつて、モジョパヒットはマレー人のミナンカバウ王國を敗ることが出來なかつた。

一六〇八年に至りミナンカバウ王國は三つに分けられた卽ちバガルルヨン、スガイタラップ、サルアソ（Pagarroejoeng, Soengaitarap, Saroeaso）の三つである。この中最も有名なのがバガルルヨンである。

ミナンカバウの國王の勢力は、地方の酋長の勢力と增加とともに衰へた。そこでバガルルヨンの住民達の間に東スマトラのバツーバラ（Batoebara）、マレー半島のヌグリ・スンビラン（Negeri Sembilan）やクラン（Kelang）其の他へ移住するものが出來て來た。一八二二——一八三二年のバヅリ（Paderi）戰爭までの間に國王の勢力は完全に失墜した。それと同時に地方酋長中には勢力を得たものがあつた。この狀態に不滿なミナンカバウ人はカンバル、タナ・ブラティ・インド

ラギリ、ブンクレン、ヂャンビー、シボルガ、バルス、ナタル、シンキルその他スマトラ各地に分散し移住して行つた。現在なほミナンカバウ人の移民傾向は强く、各地に盛んに出稼ぎに行つて居る。

× × ×

白人（ポルトガル人）の渡來前にマラッカには既に强力なマレー人の回教王國があつた。この國は支那、印度、モジョパヒット等とも交涉を有して居た。このマラッカのマレー人も先に述べたスマトラのマレー人と同一の元から出たものと考へられるが、永く分れて居たためミナンカバウとマラッカとの間の言語習慣がかなりの相異を來たしたものであらう。

一五一一年ヅ・アルブケルケはマラッカ王國を征服した。そこでマラッカ王とその一族はリアウ島に逃れた。そしてリアウ王國が出來たのである。そこから現在の南洋海岸一帶に住んでゐるマレー人の祖先が各地に擴がつた。彼等の移住地の主な所は、Tamiang, Langkat, Deli, Serdang, Koealoe, Leidong, Asahan,

Rokan 河地域、Siak 河地域、Kampar 河下流、Inderagiri 河下流、Lingga 島、バンカ島、ブリトン島、ヂャンビー及びバレンバン海岸等である。現在彼等は海岸マレー人と稱ばれてゐる。大體これ等マレー人の居住地は沼地が多いからミナンカバウ人のやうに生活の方面には進歩がない。

ジャンビー及びバレンバン地方のマレー人はジャバ人の血を多く交へて居る。これは以前同地がモジョパヒット王國（爪哇）の植民地となつて居たことがあるからである。

リァウ王國は一九一三年になつて消滅した。東部スマトラではシアック王國が非常に大きかつた。この國は後に小さく分立して Langkat, Deli, Serdang, Asahan, Koealoe, Leidong, Panai 等の小國となり現在に及んでゐる。

ジャンビー王國は一九〇三年迄あつた。バレンバン王國は一八一二年に亡んだ。マレー半島には現在なほケダ、プルリス、ペラ、ヌグリ、スンビラン、セランゴール、ジョホール、トレンガヌーの小國が續いて居る。

× × ×

なほスマトラにおける種族で今迄に述べなかつたもう一つの種族がある。即ちアチェ（Atjéh）族である。一般に言はれて居る所では、アチェ人は元は印度或はドラビタ（セイロン）から來たものであらうと言ふことである。しかしバタ族、マレー族、ジャバ族、アラビヤ人等の血を多く交へて居ることは確である。

アチェ族に於ける moesabat（意味不明）の習慣がティドレ（Tidore）及びテルナテ（Ternate）地方に於ても見受けられる。ずつと以前からアチェ人とテルナテ人との間に何かつながりがあつたのであらうか？　アチェ國は東印において最初に回教に入つた國である。回教は最初印度の商人達により十四世紀にパサイ（Pasai）へ初めてもたらされた。それより後にマレー半島（マラッカ）及びジャバに傳へられたのである。

一三五四年にスムヅラ（Semoedera）と言ふ所をマリクスサレ（Malikoessaléh）と言ふ名のスルタン（回教國王）が統治して居たと傳へられて居る。多分このス

ムヅラからスマトラと言ふ名が起きたのであらう。その以前アチェ地方は中部スマトラのアディチャワルマン王國や、ジャバのモジョパヒットの勢力下になつて居たことがある。その當時國名をパサイと言つた。

一五二四年迄ピディエ（Pidié）王國は勢力があつた。その後になつてスルタン、イブラヒム（Soeltan Ibrahim）と言ふ王が現在のアチェ國を建てた。

スルタン、イスカンダル、ムダ（Soeltan Iskandar Moeda）（一六〇六——一六一三年）王の時代がアチェ國の全盛時代で、Deli, Djohor, Siak, Inderapoera（スマトラ西岸）方面迄がその勢力圏内に入つて居た。

一六五〇年頃アチェ國は一度女王を有したことがある。この時以來同國の勢力は次第に衰へ、多くの植民地を失つた。

本當はアチェ王はアチェ皇帝（カイゼル）と言つた方が適切であるかも知れない。それはその配下に多くの小王を有して居たからである。

例の一八七三——一九〇三年のアチェ戰爭の後アチェ國王は廢されて、現在は

以前のアチェ王國の小王が各々獨立して自治政府を有して居る。（アチェ戰爭の結果和蘭が初めて完全に全東印を統治することが出來るやうになつた。和蘭の蘭印の覇權が確立したのは僅に一九〇三年である。アチェ王國はこの戰のためにつぶれたが、その後もアチェ人は和蘭人に對して屢々テロを行ひ、近年まで毎年何人かの和蘭人官吏がアチェ人のテロのために倒れた）

× × ×

以上述べた所でお分りになる如く、スマトラの民族及び言語は相當入りくんで居て、どこ迄が何語か、どの地域が何語の地域か判きりしないのが多い。

註　本文はザハリ（Zahari）氏がスマトラ島メダン市の教育會であるイブォルノ（Ivoorno）の機關誌ヘット・オウデルブラッド（Het Ouderblad）に掲載した論文を譯したのである。

東印度の人口問題

マルサスの人口論をもつてインドネシヤの人口問題を考察して見ると、インドネシヤは殆ど彼の理論通りの狀態にある。特にジャバ島に於ては、二十五年前より人口過剩が問題となつてゐることが自らわかる。これが解決のため色々の議論が行はれた。政府の中にはインドネシヤの工業化により、これが救濟を試みんとする意見もあつたが、また逆に反對する意見もあつた。その中では外領地（ボルネオ、スマトラその他）への移民奬勵が有力であつた。

さうした議論を繰返してゐるうちに、インドネシヤ人の人口はどしどし增加して行つた。遂に一九二年に至つて一大危機が到來し、再びこの人口問題について世人の目を醒まさせた。

東印中でジャバ島は最も人口增加の率が高く、且つ速かである。最近發行されたポケット統計手帳には、次のやうな數字が出てゐる。但しこゝに揭げたのはジャバのインドネシヤ人のみの人口である。

一八六〇年	一二、五一四、〇〇〇人
一八八〇年	一九、五四一、〇〇〇人
一九〇〇年	二三、六九〇、〇〇〇人
一九二〇年	三四、四二九、〇〇〇人
一九三〇年	四〇、八九一、〇〇〇人
一九四〇年	四七、四五六、〇〇〇人

この中一昨年（一九四〇年）の分は戰爭のため國勢調査が中止されたので、その人口數は推定人口數である。一年間の推定增加數は一・五パーセントの割である。

もし或る種の障害を取り除いたら、二十五年間にジャバ島の人口は二倍の數に

増加してゐたであらう。一八六〇年――一八九〇年に至る三十年間に人口は倍加してゐる。過去八十年間にジャバ島の人口は四倍にふえてゐるのだ。

勿論マルサスの理論通りには人口は増加してゐない。しかしこの調子で人口が増加して行くと言ふことは將來重大問題である。ジャバ島の人口増加數は毎年約五十萬人なのである。この五十萬と言ふ數字はジャバ島に取つて非常に大きな數だ。特にジャバが農業國であると言ふ所から考へると、全く大變な數字である。

オランダは工業國である。そして面積はジャバの四分の一に過ぎぬが、一方人口も九百萬人を越えない。このオランダの割で計算すると、ジャバ島の人口は三千五百萬乃至三千六百萬程度となる。

農業國と言ふ現狀から見て、この三千萬人と言ふ數は既に多すぎるのである。これ以上の人口があれば各人の生活は非常に壓迫を受けることになる。そして現在ジャバの人口は人口の飽和狀態よりも、千七百萬人も多過ぎるのである。

今ジャバ島を離れて他の東印の島々について考察して見よう。東印の全面積の

七パーセントに過ぎぬジャバ島に、オランダ人其の他の外人を合せて、四千八百四十一萬六千人が住んでゐる。その反面ジャバの十三倍以上にあたる外領地（ジャバ以外の東印地方）に、僅に二千二百六萬人しか住んでゐない。つまりジャバ島の一キロ平方あたり三百六十人であるに反し、外領地では僅に十二人に過ぎない。全東印の平均一キロ平方あたり人口數は三十七人である。

なほ我々は外領地の半分以上が深林地帶である點を想起すべきである。一九三一年の調査では、深森面積及びその百分率は、

スマトラ	二九〇、〇三〇キロ平方	（五八パーセント）
ボルネオ	四一八、八〇〇キロ平方	（七〇パーセント）
セレベス	一一一、〇〇〇キロ平方	（五八パーセント）

ニューギニア　三八〇、〇〇〇キロ平方
（七七パーセント）

である。

外領地の合計深森面積は百二十一萬一千七百三十キロ平方で、全面積の六八パーセントが深森と言ふことになつてゐる。しかるにジャバでは僅に深森はその六パーセントを占むるに過ぎない。ここにおいて新なる開拓地の建設は殆ど見込がない。

マルサスの幽靈が、既にジャバに出現してゐるのだから、數百萬の移民をジャバから外領地に送り出す必要がある。外領地の深森を切り開いて、耕地と住宅を作らねばならぬ。

それと同時に、ジャバは勿論のこと外領地にも工業を興さねばならぬ。工業の發展なく、單なる住民の移住は苦痛と困難の移住を意味するのみで、決して救濟にはならぬ。國家の繁榮は人口過剰の解決によりもたらされる。移民政策は、常

に國家の繁榮を目的として行はれねばならない。

註　本文は東印のガンジーと言はれたモハマッド・ハッタ氏が昨年（一九四一年）五月十九日のブマンダガン紙に掲載した人口問題に關する論說の譯文である。ハッタ氏は東印度獨立運動の大物であり、舊蘭印政府によりバンダネイラに流刑されてゐたが我が軍の同地占領により解放された。

米國におけるインドネシヤ人

現在アメリカ合衆國には一千人以上のインドネシヤ人が住んでゐる。

彼等の中の一部は、もうすつかり米國人に成りきつて、米國人の百姓娘を妻にして農業を營んでゐる。また職工等をしてゐる者もゐる。しかし、大部分の者は今なほ自分等の祖國はインドネシヤ（東印度）だと思つてゐる。そしてそれ等のインドネシヤ人はアメン・ヤメル氏に指導されてゐたインドネシヤン・コーポレーション・フォア・デモクラシーを組織した。

現在、米國にゐるインドネシヤ人は、元は主として船員として米國へ來た者であるが、ジャバ人中には、船のボーイをしてゐた者が多い。これ等の者は米國へ來て、その都市の立派なのと賑やかなのに驚いて、陸に仕事を求めて脱走した者

が大部分を占めてゐる。そして、彼等は自分等はフィリピン人だと自稱して米國人を欺いてゐる。

しかし、最近は學問を研究に來るインドネシヤ人のインテリだとか、東印の舞踊を見せに來る藝術家等の眞面目な來訪者で主がある。

從來は在米インドネシヤ人の間にキリスト教と回教のことでゴタゴタが起きてゐた。そして、一九二五年には、スマトラ生れの回教徒が殺害された事件が起つてゐる。この被害者はキリスト教徒に改宗したと見做され、回教の狂信者に殺されたのださうだ。しかし、民族意識の發達につれて、最近は紛爭がなくなつた。

近頃の在米同胞（インドネシヤ人）は回教に對する信仰を失つてゐるやうだ。根が水夫上りの者が多いから、長らく米國に居て回教の勢力から遠ざかつてゐると、次第に回教の信仰が薄らいで來るのは當然である。更に多少信心深い者でもエロティックなダンサーに抱きつかれては回教を忘れるのも無理はない。

現在在米インドネシヤ人を指導してゐるのは、チャリー・アビディン氏である。

彼はスペイン系の女を妻にして、既に子供も出來てゐる。

以前、インドネシヤ人には織物その他の工場の職工になつてゐる者が多かつた。九ドル乃至十五ドルもの日給を貰つて、彼等は全く米國の生活に滿足してゐた。夜になると、膨らんだ財布を懷中にダンス・ホールや映畫館を歩き廻つて、祖國の事などすつかり忘れてしまつてゐた。しかし、時勢が移り、失業時代に襲はれて、インドネシヤ人は相爭つて職を探し求めねばならなくなつた。もう回教とキリスト教の爭ひどころではなかつた。

職にありついても、勞働時間が長いため遊び廻る暇も無ければ、金もなくなつた。その頃ユニオンと呼ばれてゐる勞働組合が結成され、米國における資本家と勞働者の關係は、更に一層尖鋭化して來た。そして結局ユニオンが勝利を得て、資本家は職工を雇ふ場合ユニオンに話し込まねばならないことになつた。

さう言ふ狀態で、我々の同胞（インドネシヤ人）は多く工場における職を失ひ、その結果、料理店のボーイにでもなるほかなくなつた。我々の同胞の手になる料

理店や小ホテルも開業せられた。また周圍の情勢に刺戟されて、インドネシヤ人の結社を組織する機運が向いて來た。そして遂にインターナショナル・コーポレーション・フォア・デモクラシー（ICD）を結成するに至つたが、後にインドネシヤン・コーポレーション・フォア・デモクラシーとなり、曩に述べた如く、現在はチャリー・アビディン氏が支配してゐる。

在米インドネシヤ人の指導者たるこのチャリー・アビディン氏は、スマトラ島のアチェ人で、もうインドネシヤへ歸る氣持はないと言つてゐる。

米國においては、公式には白人も、日本人も、支那人も、ネグロもみな同一の權利である筈なのであるが、實際には人種の差別が甚だしく、黑人は依然として奴隷以上の地位を有してゐない。黑人の知識階級や資本家も矢張り奴隷なみの扱ひを受けてゐる。しかし、我々インドネシヤ人は、白人と黑人の中間と見做されてゐる。

白人の料理店で我々は食事をすることが出來るが、勞働者になると、ネグロな

みの給料で日給四ドルを越すことが出來ない。

在米日本人は有色人を非常に高く見てゐて、黑人と白人とを全然區別しない。かつて日本人の料理店へ有色人が入つて來ると、白人よりも先に料理を運んだりしたことがある。日本人は言ふ「米國にゐる有色人はみな同胞だ」と。

我々の同胞（インドネシヤ人）は、死ぬと有色人種の墓地に葬らねばならぬ。しかも、その墓は狹くて、死人があると先きの死者の上に埋めねばならぬ。これが在米有色人の現狀である。

註　本文はスマトラ島のメダン市で發行されてゐたブニュダルと言ふ週刊雜誌より譯したものである。

實現したジョヨボヨの豫言

西曆千百三十五年から千百五十七年まで、ジャバ島クディリの王であつたジョヨボヨ（ジャヤバヤとも言ふ）が生前に、

「若しジャバ島のケロル（野菜の名）の葉大となりたる曉、黃色人來りてこの國を支配せん。但し其の期間は玉蜀黍の壽命と等しき期間にして、救世主ラツー・アディル現れ、領土はすべて領民に返還され、白人の支配終りて國土繁榮せん」

と豫言したと言ふ傳說が、數百年前からジャバ島の土着民衆の間で信ぜ

られてゐた。

この豫言中ケロルの葉大となりたる曉と言ふのは、ジャバの人口が稠密となりたる時の意味だと解釋されてゐる。現在ジャバ島は人口過剰であつて、ケロルの葉は既に大になつたと認めてよい。

黄色人來りてこの國を支配せんと言ふ。この黄色人とは昔は支那人の事だと考へられてゐたが、日露戰爭以來日本人のことと考へられるやうになつた。

玉蜀黍の壽命と言ふのは、玉蜀黍は穀類の中で一番早くみのり、三ケ月にして食用に供せられる所から短期間の意味である。つまり日本人が東印を占領し白人を追ひ出し、ラッー・アディルが現れてジャバ人が救はれると言ふのであるから、舊和蘭政府に取つては實にけしからぬデマ

であつたわけだ。

昨年我が軍の南部佛印進駐以來この豫言の實現近しとして東印度の民衆は今か今かと待ちかまへてゐたのである。昨年（昭和十六年）九月頃蘭印政府はこの豫言のあたらざる所以を强調し、白人が東印より退却するなど絶對にあり得ないと各新聞紙に書かせたものだが、遂にこの豫言は實現した。

たゞ待だるるものは救世主ラッー・アディルの出現のみである。一體誰がこのラッー・アディルとして出現するか頗る興味ある問題であらう。

昭和十七年八月廿五日印刷
昭和十七年八月三十日發行

二〇〇〇部

（出文協系認
あ 170359）

㊙ 定價 壹圓八拾錢

著者　奈良市西御門町　宮武正道

發行者　奈良縣丹波市町川原城三〇七　岡島善次

印刷者　奈良縣丹波市町川原城三〇七　天理時報社
右代表者　岡島善次
（西・奈・一）

發行所　天理時報社
會員番號　一一九五〇一
奈良縣丹波市町川原城三〇七
振替大阪二八四二一番
東京・豐島區駒込六丁目八七五
振替東京三二三一六番

配給元
日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二丁目九

時報社の語學書

好評三版

天理外國語學校教授
梅鈞
平岩房次郎 共著
小島武男

學生

中華發音字典

規格外A6判・インディアン紙・三三〇頁

定價壹圓五拾錢
送料八錢

支那語入門者の最も惱まされる發音を明瞭平易に教示した良書。
語彙豐富、絶對に類書なし!!

天理外國語學校教授
佐藤榮三郎著

蘭印馬來語讀本

定價一圓
送料八錢

時報社の語學書

最新刊!!

天理外國語學校教授 武居喜春 著

文法註釋附

馬來語讀本

全三卷

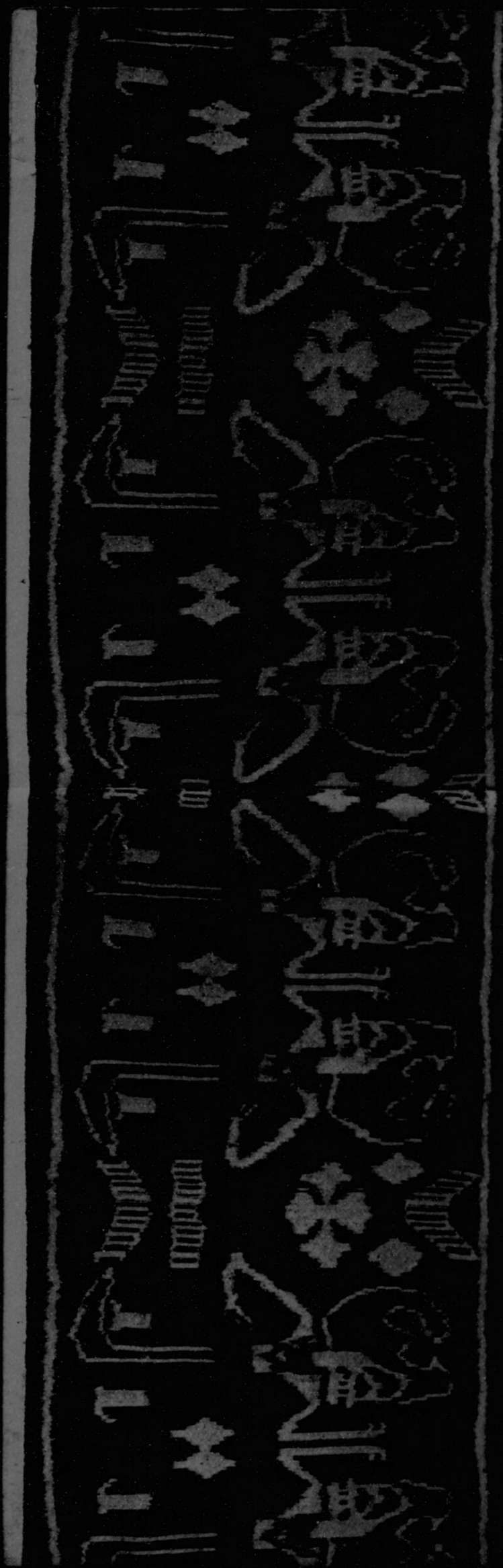
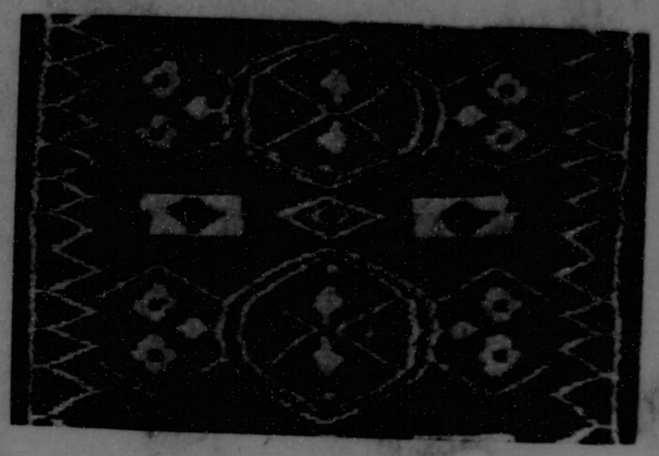
A5判・九〇頁乃至九六頁 【定價各一圓五十錢・〒十二錢】

本書の特色

① 初等教科書であり且又獨習者にも適するやう編輯されたこと
② アリフバータの發音を音標文字にて表示したこと
③ 英語式綴と蘭語式綴との關係を明かにしたこと
④ 基礎文法及特殊用語を脚註に明解したこと

馬來語原書入手難を考へ、本書は馬來語勉學者の讀物としても利用せらるゝやうに編輯に留意されてゐる。

第一卷出來! (第二卷は九月上旬、第三卷は九月下旬刊行)



ex libris